

山本周五郎初期ペンネーム再考

—「火星人の地球襲撃」をめぐって—

竹 添 敦 子

はじめに

2017年2月14日は山本周五郎没後50年である。半世紀を経ても作品の多くは色あせていないし、相変わらず映像化も盛んである。ただ、それらの多くは主として彼の後半生、戦後の作品である。一方で、戦前の、特に最初期については未だ不明な点も多く、ペンネームについては全容が解明されていない。甲野信三が山本周五郎の新たなペンネームとして浮上してきたのは2011年のことであり⁽¹⁾、これについてはすでに輪郭を紹介した⁽²⁾。また、俵屋宗八をはじめとする戦前の筆名についても同様に紹介済みである⁽³⁾。さらに、戦後の筆名についても新たな作品と併せて追加確定できたと考えている⁽⁴⁾。

周五郎のエピソードを紹介する際よく引用されるのが、博文館の編集者であった高森栄次の証言である⁽⁵⁾。博文館は周五郎の修業時代を支えたとも言える出版社であり、そのため周五郎のペンネームのほとんどは博文館雑誌から発見される。高森は井口長次（後の山手樹一郎）とともに少年誌、少女誌を担当していた時代が長かったので、周五郎の原稿持ち込みや原稿料前借りの事情についても詳しい。その高森が「はじめて山本周五郎を読んだのは、ウェルズの『火星人襲来』の翻案」⁽⁶⁾だと語っている。「火星人襲来」とは、おそらく『宇宙戦争』（1898年）のことであろう。ただ、これまで周五郎の年譜にはそれに類する作品を執筆した事実は記されておらず、この対談を承知していたはずの周五郎研究の泰斗・木村久暹典氏の著作にもこの点に触れたものはない。さらに、日記や自筆作品目録『わが為事』（未公刊）にもこれに関する記述は見当たらない。

初期の、特にペンネームを使用して書かれた作品については『わが為事』にも記入されていない場合が多い。そこで高森が博文館に入社した1928（昭和3）年をはさんで、大正末年から5年間の博文館雑誌を調査した⁽⁷⁾。高森が「はじめて山本周五郎を読んだのは」と発言している以上、高森が博文館入社後に原稿を見たか、自社の雑誌を繰っていて発見した可能性が高いからである。もっとも、周五郎は井口長次を通じて博文館と縁ができるので、「火星人襲来」は井口入社（1927年）後に⁽⁸⁾書かれたと考えるのが妥当であろう。その結果、『宇宙戦争』の翻案と思われるものがふたつ見つかった。「火星人の地球襲撃」（『少年少女譚海』第11巻第1号～第7号、1930年）と「空魔襲来」（『少年世界』第36巻第4号、1930年）

である。前者の作者は高森栄二、高森栄次のペンネームだと考えるのが自然である。さらに後者「空魔襲来」の作者は小野廸夫、『豹^{ジヤガー}の眼』(1928年)や『怪人Q』(1930年)で有名な高垣眸の別名である。となると、「火星人の地球襲撃」の方が可能性としては高いのだが、作者が高森栄二となっている以上、検討が必要である。

そこで、小論ではⅠで当時の科学小説(以下SF)の輪郭を探りつつ、この「火星人の地球襲撃」の特徴を紹介する。続くⅡでは、博文館雑誌と周五郎の関係を確認しながら、はたして「火星人の地球襲撃」の作者は誰なのか検討し、筆者なりの結論を導きたい。そのことによって最初期の周五郎のすがたに近づけると思うからである。

I

H. G. ウェルズの『宇宙戦争』(The War of the Worlds)は1898年の作品、日本では明治31年にあたる。原題は二つの世界、すなわち地球世界と地球外世界との戦争という意味だと思われるから、地球外世界に関心が向けられ始めた時代を象徴したタイトルと言えるだろう。まさに訪れんとする20世紀を予兆する作品だったと言ってもよい。一方で世紀末的な雰囲気があることも考慮する必要があるだろう。この作品は世紀を超えて現在でも読まれているので、もはやSFを代表する作品のひとつである。本章では『宇宙戦争』の翻案を扱うが、その前に明治初期の日本にはどのように海外のSFが紹介されていたのかを見ておきたい。

横田順彌の『日本SFこてん古典』(1980年)によれば翻訳SF第1号はオランダ人のジラス・コリデス「全世界未来記」で、1868(明治元)年のことらしい⁽⁹⁾。その後「翻訳SFヴェルヌ時代」が到来する⁽¹⁰⁾。SFのうち地球外世界を扱ったものに限っても、ジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』(1865年)の翻訳が1880(明治13)年であるから⁽¹¹⁾、欧米の文化を吸収しようとする明治初期の人々のすさまじい意欲がわかる。

明治も後半になるとSF雑誌が誕生する。1906(明治39)年に『探検世界』(成功雑誌社)、2年遅れて1908(明治41)年に『冒険世界』(博文館)が創刊された。『探検世界』は「探検事実譚」や「学術」、「珍事異聞」といった項目ごとに記事が掲載されている。創刊号には幸田露伴、岩野泡鳴、押川春浪らも登場するなど、なかなか豪華なつくりである。同誌のうち確認が可能な号の中で地球外世界を扱ったものを調べてみた。

『探検世界』創刊号の「学術」欄「月世界と探検」(理学士・星辰道人)は、地球の経度を観測するために月の観測が重要だとし、小説のような月世界旅行は現実には難しいと説く⁽¹²⁾。星辰道人はおそらくペンネームであろう。その後「学術」欄から地球外世界はいったん消えるが、第4巻第3号は「月世界」の特集版となっており、複数の理学士が「月と地球との関係」をはじめとする科学的な解説を載せている⁽¹³⁾。なお、同号には「月世界探検隊」(堀内新泉)をはじめとする小説や月にまつわる文学作品も掲載されている。注目すべきは「探検

小説」や「破天荒」と題された読み物である。第1巻第5号「水星探検記」（堀内新泉）、第6号「月世界探検記」（同）、第3巻第2号「金星探検記」（同）、第3号「続金星探検記」（同）、第5号「理学的火星通信」（阿部吞宙）などはすべて地球人の訪問記であり、探検隊が水星人を捕獲したり、火星人の大きさに驚愕したりという荒唐無稽の内容である。金星探検だけは英国記事からの翻案であるらしく、少年が金星人にもてなしを受けるというもので、金星は天界であるように叙述されており、浦島伝説を思わせる。第6巻第1号（1908年）の「火星地球戦争未来記」（小川蛍光）は十数世紀後の地球と火星との戦争を描いたもので、地球外世界の空中艦隊が地球を襲撃するという内容の小説が初めて掲載された。火星軍との空中戦で「地球上の世界は総て滅亡したも同様に成った」が、「火星の人間が地球に来ては、身体の重量が急に二倍に成ったので、何奴も此奴も思ふやうに動けない」⁽¹⁴⁾ことになり、火星人たちはことごとく死に至る。『宇宙戦争』と輪郭は似ているが、内容はまったくの別ものである。

次に、『冒険世界』を見てみよう。第3巻第4号（1909年）には「天界の大怪物ハレー彗星物語」（天眼通人）が掲載されている。ハレー彗星の接近が目前に迫った時期らしい記事である。地球滅亡説を取り入れて物語風に書かれてはいるが、比較的冷静に彗星の成り立ちなどを解説し、滅亡説については心配無用と結論づけている⁽¹⁵⁾。『冒険世界』は装丁や記事の種類、配分なども『探検世界』に比べてセンスがよく、記事の質もやや高いように感じられる。もっとも、興味深いのは執筆者の表記である。押川春浪が主筆であった第3巻第7号を例にとると、「志賀重昂君」のように執筆者に「君」をつけている場合は依頼原稿だと思われる。〇〇生、〇〇子、〇〇記者といったケースは編集部の執筆であろう。また虎髯大尉、黒面中尉、猿面冠者のようにユニークなペンネームの記事も編集部が書いたと思われる。名前に較べ誌面構成は現実的で、荒唐無稽な物語もなく、海外の珍しい風習や事件を採り上げることが多い。おそらく欧米の文献から情報を得て作られていたのであろう。

さて、『冒険世界』では地球外世界はどのように扱われているのだろうか。興味深いことに火星による地球襲撃ものが掲載されているのである。ひとつは「火星地球戦争未来記」の類似作品とも見える、火星隠者の「火星軍隊の地球襲来」（第3巻第7号、1910年）、もうひとつが『宇宙戦争』の翻案と思われる「世界的大混乱」（虎髯大尉）で、これは1912（明治45）年、第5巻第7号からの連載である（ただし、未完）。ともに執筆は編集部であると思われる。虎髯大尉は当時主筆であった阿武天風のペンネームのひとつである。いずれにしても、ウェルズの『宇宙戦争』出版から10年余で類似作品が書かれていることになる。

「火星軍隊の地球襲来」は次のような内容である。発展が極まった火星人類は滅亡の危機を迎えており、地球征伐を企てる。準備として巨大望遠鏡を造った彼らは地球を覗きつつ、頭尾国（引用者注 中国、以下同じ）、赤髯国（欧米）、黒人国（アフリカ）などと分類し、

簡単に征服できると考える。そして「頭尾国から海を渡ると小さい島国が横たはつて居る。(中略) 体格は小さいが何処となく敏活なところがあるやうに見えるぞ。イヤ兵隊が一生懸命で訓練を行つて居る」⁽¹⁶⁾などと日本についても喋っている。さて、2,000 隻の飛行艦隊がそれぞれ 2,000 名の兵士を乗せ (400 万人!)、5 年分の食糧と 10,000 発の爆弾を積んで、1 時間約 3,000 マイルの速力で地球めがけて出発した。火星軍に対し、地球では火星防衛同盟軍が成立。火星の重力が地球の半分しかないので、火星人類は著しく体力が虚弱であると分析し、彼らが地上に降りれば勝算があると考え。はたして空中戦では痛手をこうむった地球だが、火星人類が地球表面に降りた瞬間、「悉く体と組織を破壊されて死んでしまった」ため危うく勝利し、「列国の代表者が悉く東京に集つて、盛大なる大祝勝式を挙行することになった」⁽¹⁷⁾。火星と地球の重力の違いを解決策に用いているところは、「火星地球戦争未来記」と同じであり、当時火星の重力が話題になっていたことが分かる。また、上で引用した日本の描写や大団円の祝勝式は、富国強兵時代の雑誌らしい日本人称賛、軍隊賛美で一貫している。

続いて「世界的大混乱」であるが、これは完全に『宇宙戦争』の翻案である。場所、登場人物を日本にしているだけで、基本的なところはほぼ原作どおりである。ウェルズの原作では天文学者のオーグルビーが、ウォーキング付近に流れ星が落下しているのを発見する。「世界的大混乱」では天文学者・荻生教授が大流星の落下地点、大森海岸に出向く。直径 30 ヤード円筒形というところはまったく同じである。主人公であり語り手である原作の「わたし」は「吾輩」として登場し、新聞記者が加わるところ、円筒から発せられた熱線が人々を焼き払うところ、軍の出動、火星の第二の円筒が落下するところもそのままである。「吾輩」は妻を連れて上野の甥 (原作は妻の従兄弟) のもとに避難する。が、馬を駆って高輪に引き返し、その途中、巨大な 3 本足の怪物と遭遇、自宅に戻ったところ生き残りの兵士が逃げ込んで来た。二人は移動を開始するが怪物との戦闘中にはぐれてしまう。この展開も同じである。この後が掲載されず、未完に終わった。おそらく明治天皇の崩御と重なったため、タイトルについての配慮が必要となり、掲載を自粛したのではないだろうか。

指摘しておきたいのは、原作の文明論とも言える冒頭の記述に微妙に変更が加えられている点である。もう少し詳しく言えば、原作よりも文明批判の部分が抑えられ、主張が曖昧になっている。それが虎髯大尉 (阿武天風) の思想であったのだろう。改造社版の翻訳と比較したい。

吾々は火星人類の来襲といふことをば、余りに意地悪く考へる前に、吾々文明の民が自ら棲んで居る地球表面上の生物を滅ぼしつゝある事を顧みなければならぬ。豪州へ英人が植民してから、タスマニアの土人は絶対に其跡を絶つた。日本でも既にアイヌ

が根絶しかけて居るではないか。進化といふことは総ての場合に真ではない。自然淘汰と人為淘汰は常に地球表面上に行はれつゝあるのだ。要するに劣れるものは亡びる、若し吾々より遙かに光輝ある知識と、強烈なる力と堅固な意志とを有つて居る火星人類が地球表面に植民するやうなことがあると、吾々人類はタスマニアの土人の如くに最後の日に到らなければならぬ。⁽¹⁸⁾ (「世界的大混乱」)

われわれは火星人に苛酷な批判を加へる前に、人類が如何に残忍なことを、最近に滅亡した大野牛、ドードー鳥等の鳥獣に対してばかりでなく、同じ人類の中の劣等な民族に対してやつたか、よく考へて見る必要があらう。あのタスマニアの土人は何処から見ても立派な人類であつたが、僅か五十年間に、ヨーロッパの移住民の為に完全に滅されてしまった。果してわれわれ人間は、火星人が宣戦して来た場合に、かれこれ言へるやうな慈悲の使徒であつたらうか？⁽¹⁹⁾ (『宇宙戦争』)

両者ともに現在の人権感覚とはほど遠い表現が多い点には注意が必要だが、タスマニアの部分などはほぼ原作どおり。「世界的大混乱」の方はアイヌ民族への危惧が加えられて、日本の作品を装っている。しかし、自然淘汰という単語を使用している点に見られるように、加害者、侵略者についてはぼかされた表現になっており、英語話者と日本語話者の感覚の違いというだけではすまされない書き換えである。翻案の際の表現例として非常に興味深いのが、小論では指摘するにとどめる。

虎髯大尉こと阿武天風は、前年から押川春浪が去った『冒険世界』の主筆となっており、誌面の相当部分を担当していた。海軍兵学校を経て日露戦争に従軍した阿武は、冒険小説、軍事小説を得意としており、「世界的大混乱」のような作品はむしろ珍しい。ただ、翻案とは言え、これは日本で最初の『宇宙戦争』である可能性が高い。いずれにしても地球外世界との接触を扱った作品では『冒険世界』の方が『探検世界』に比べて質が高く、設定のみならず文章にもリアリティがあり、読み物としては格段に勝っているのである。その後、『宇宙戦争』は昭和になって改造社から木村信児訳で単行本が出る(1929年)。『世界大衆文学全集』の一冊、いわゆる円本である。これが戦前の最もポピュラーな翻訳で、続いて扱う博文館の2作品もこの翻訳に影響を受けたことは明らかである。

冒頭で挙げたふたつの作品のうち、まず、短篇である『少年世界』の「空魔襲来」(小野廸夫)から見てゆくことにしたい。少年誌では主人公を少年(中学生)に変更するのが一般的である。この場合も同様で、ふたりの中学生という設定になっている。「空魔襲来」は「一九三〇年の夏、いやに蒸暑い晩だった」⁽²⁰⁾という一行から始まる。まさに当年に設定しているわけである。「日本を、英米二大国は共謀して陥れようとしてゐる」⁽²¹⁾と軍縮会議の

ニュースがラジオから流れる中、大東京銀座通りの空に流星が出現する。三里塚の落下地点にキャンプ中の2少年（東京中学の3年生）が駆けつける。村人、新聞記者、天体研究の世界的権威・吉村理学博士らと共に近づくと、楕円弾は地球外生物の手になるものと判明する。3日目に楕円弾の上部に穴が開き、「コンニャク玉のやうな塊と、蛇のやうな数条な触手」⁽²²⁾をした火星人類が現れ、薄青い光線で人々を焼き尽くし、吉村博士も犠牲となる。混乱の中で少年たちははぐれ、ひとりには吸血火星人に捕まってしまう。12個の怪物が大東京に進軍を開始したので、「全世界は恬然と色をうしなつた。東京、日本それを征服しつくして彼等は、やがては欧羅巴、アメリカ大陸へも向ふだらう。もはや、ロンドン会議で、補助艦の比率を争ふやうなケチな真似はしてゐられない」⁽²³⁾と、各国の航空船や戦艦隊が東洋に向かって出発する。火星人は成田、佐倉を侵略し、船橋に迫る。その間にも逃げ遅れた人々を食餌用の金属檻に投げ込んでゆく。檻の中で再会したふたりの少年は、身をおどらせて火星人の白煙放射器を掴み、自動車に飛び乗って誘導した後、火星人の武器を用いて彼らを焼き尽くす。そして一篇はこのように終了する。

人類全体の恩人として、二少年は今やキリストとも、ニュートン、エジソンとも、肩をならべる人類最高の榮譽をあたへられた。

無邪気聡明な二少年は、今、全世界の人々から贈られた、山なす感謝状、記念メダル、記念品の中にうづもれながら、真摯な第二学期の勉学をつづけてある。⁽²⁴⁾

出だしは好調で、落下地点での様子、博士の死など『宇宙戦争』さながらであったが、火星人を吸血動物風に変えてしまったことで收拾がつかなくなったのかもしれない。結末は急ぎすぎの感があり、檻からの脱出、自動車で火星人を引きつける展開など、かなりのスピードである。日本少年を強調する展開、軍縮会議との強引な結びつけなど、ストーリーの荒さも気になる。ただ、当時の少年誌の場合、このような少々強引な展開がないと読者の共感を得られないのも事実である。「勇敢機敏」で「決死の奮闘」⁽²⁵⁾をする日本少年の養成は、当時の少年誌の目的のひとつでもあった⁽²⁶⁾。

さて、『少年少女譚海』（以下、『譚海』）の「火星人の地球襲撃」（高森栄二）である。「空魔襲来」とは異なり7回連載であるため、まとまりも良く、細菌による火星人の死まできちんと書かれており、『宇宙戦争』の基本的な枠組みは守っている。主な登場人物は天野理学士とその甥・速雄少年である。少年誌の倣いに従って、ここでも主人公のひとりが少年である。ただ、少年と書かれているだけで、中学生とは書かれていない。これは掲載誌が小学生を主な読者とする『譚海』であるからだろう。第1回の挿絵では速雄少年は小学生にしか見えないが、回を追うごとに少しずつ年長になっている印象である。ところで、この作品の冠は「写

真小説」である。どこをどう見ても写真は挿入されていないのだが、なぜか写真小説の表記を保ったまま連載されている。

ストーリーは以下のとおり。2年前から火星観察を続けていた「^{アッ}穩れたる青年天文学者」⁽²⁷⁾天野理学士と、甥で助手でもある吉川速雄少年は、火星人がやって来ることを承知し、軽井沢に向かう。円筒形の落下物から火星人が出現するところに遭遇し、次々と訪れる天文学者や新聞記者、野次馬に注意を喚起する。しかしなかなか理解が得られず、ついに火星人の襲撃で人々が命を落とす現場を目撃する。巨大な三本脚の機械に入った火星人たちには軍隊は手も足も出ない。ふたりが空き別荘に退却したところへ兵士がひとり転がり込んできた。さらに第2第3の円筒が落下、15体の火星人が現れる。勇敢な将校が戦いを挑むも無残な最期を遂げ、速雄少年は彼の遺した馬にまたがって軍へ救助要請に向かう。現場に残った天野理学士と兵士は助け合いながら脱出をはかる。ふたりがもはやこれまでと覚悟したところに飛行機が現れ、巧みな操縦術で火星人を翻弄する。機上にいたのは速雄少年であった。やがて火星人は地球の細菌に侵され、全滅してしまうのであった。

この作品は『宇宙戦争』から火星人の形状をほぼそのまま踏襲し、最初の殺戮場面、兵士との出会い、別れ、再会もなぞり、救援要請のための移動、主人公の死の覚悟とあっけない結末という流れも守っている。紹介した作品の中ではもっとも原作に近い。しかも挿絵の円筒から出てきた火星人はいわゆる蛸型火星人所のものであり、巨大三脚に入ったところは改造社版『宇宙戦争』のカバー絵をそのまま模したように見える。一方で、主人公たる「わたし」は存在せず、天野理学士がそれを代替し、活躍するのはむしろ速雄少年である。ここでも少年は馬を乗りこなし、軍を説得して飛行機で救出活動も行う。学者とその少年助手というスタイルを守っている点も、亜流ながら少年探偵ものの系譜に属していると考えられる。

もちろん、この作品でも時代の影響は見られる。傷を負った兵士が連隊への報告のために別荘から去る場面。さらには天野理学士と再会した兵士がふたりで逃げる場面はこうである。

速雄少年は心配さうに兵士の顔を見あげる。

『大丈夫ですとも、私も帝国軍人の一人です、今に奴等に目にもの見せてくれますぞ』⁽²⁸⁾

あくまでこの間の恩に感じてゐる兵士はいつかなその場を動かうともしない。もう観念の眼を閉ぢ、齒を食ひ縛つて、倒れたまゝだ。

『いけない。お互に日本男子だ。二人は最後まで手を握りあつて、生死を共にしようではないか。だが犬死をしては何にもならない。さア、僕と一緒に隠れてくれたまへ』⁽²⁹⁾

『残念だツ!!』理学士は^{うつぶ}打伏したまゝ叫んだ。『もう駄目だ、君、君、覚悟し給へ。お

互ひに日本男児だ。潔よく立派に死ぬんだ。たとへ一人でも二人でも、憎むべき火星人をやつつけたと思へば満足だ。君、華々しく奴等と最後の戦をやる覚悟をするんだ』⁽³⁰⁾

このように帝国軍人や日本男子の強調がところどころに挿入されてはいるものの、「火星人の地球襲撃」では「空魔襲来」ほど直接的な時事テーマは書き込まれていない。結末にしても天野理学士が「神様のお思召で、自然の力で彼等は死んで行つたんだね。地球はやはり人間ばかりが住むところなのだ」⁽³¹⁾と眩き、3人を乗せた飛行機が東へむけて飛んでゆくという、きわめてあっさりしたものである。そのことがこの作品を読み物として安定させ、面白くしている理由なのだと思う。冒頭と最初の攻撃後の場面からも引用しておく。

二人は暫らくの間黙りこくつて、すわつてみた。汽車は深夜の闇をついて、西へ西へと走りつづける。眠られぬまゝに酒に酔ひしれた多くの乗客が、次の箱で陽気に騒いでゐる。窓の外では、遠くの町の点々とまたゝく灯が、縞をつくつて流れてゆく。日本中の誰も彼も、まだ何事も知らないのだ。眠れるものも、陽気に騒ぎつづけてゐるこの汽車の乗客も、この列車の速力の凡そ幾億倍もの速さで、現に人類に近づいてゐる災害などは夢にも知らないでゐるのだ。⁽³²⁾

二人の歩く路には、あちらの草叢、こちらの路傍に、無残にも怖ろしい殺人光線のために焼き殺された憐れな人たちが虚空をつかんで斃れてゐる。二人は哀しい犠牲者たちに向つて、ねんごろに合掌しては歩を運んでゆくのであつた。⁽³³⁾

このように「火星人の地球襲撃」はエンターテインメント性を備えながらも、情景描写に優れ、主人公たちには冷静さと客観的な分析力が付与されており、他者への配慮と畏敬、死者への哀悼が書き込まれている。この点は強調して良いだろう。『宇宙戦争』の少年向け翻案としては、相当に完成度が高いものになっているのである。

II

さて、「火星人の地球襲撃」の作者である高森栄二について考えてみたい。この名前からは当然のことながら博文館の編集者・高森栄次が想定される。やはり編集者だった井口長次（山手樹一郎の本名）が井口長二として原稿を載せているのと同じである。ただ、高森栄次入社後の博文館の諸雑誌を調査したが、高森栄次、あるいは高森栄二、もしくはそれに類する名前で開催されている作品はほとんどない。現時点で発見されているのは「火星人の地球襲撃」だけである⁽³⁴⁾。この作品ははたして本当に高森栄次が書いたものなのか、本章ではこ

の点に迫りたい。

高森栄次は早稲田大学英文科卒業後の1928年、「そろそろ功なり名を遂げて、下り坂にかかっていた」⁽³⁵⁾博文館に入社した。当時の博文館には森下雨村、平林初之輔、横溝正史、山手樹一郎、水谷準、乾信一郎ら名物編集者が大勢いて、その多くが作家・翻訳家としても活躍した。そんな社内で高森はどちらかと言えば手堅い編集者として多くの雑誌に関わり、『新青年』の最後の編集長でもあった。戦後は博文館の廃業とともに博友社を設立、取締役になっている。「二十五歳の時に履いた編集者の草鞋の紐を、それから五十七年め、八十二歳の旅路の果に解く日まで、奈落の下で舞台を廻し、目立たぬようにドブ板の上を歩きつづけた」⁽³⁶⁾編集者である。しかし、英文科出身でもあり、若い時代、翻訳はお手のものであったようだ。『新青年』増刊制作時のエピソードがある。

版權も何もない。ロイヤルティがないから、ただでしょう。それで僕らも小遣い稼ぎに翻訳をするわけです。新橋の詰めに、外国のそういう雑誌を売っている店があって、そこへみんな種さがしに買いに行くわけです。いいと思うのはみんなが選ぶから、僕もせっかく徹夜して翻訳してみますと、だれかが先に持って来ているわけです。

それでいまでも笑うんですけども、創作翻訳をしたんです。外国人の名前をでたらめに片仮名でつけるわけです。そして翻訳のごとき体裁を装う。これは絶対ダブらないですからね（笑）。僕だけかと思ったら、みんなそうらしい。死んだ玉川一郎なんか聞いても、みんな創作翻訳なんです。横溝正史もずいぶん創作翻訳やったという話をしています。⁽³⁷⁾

当時の編集者のパワーを感じると同時に、高森にも相当な創作の力量があったことが明かされている。『宇宙戦争』を翻案する力は十分備えていたに違いない。もっとも、これだけ正直にエピソードを告白する高森が、『宇宙戦争』の翻案をしたとはどこにも書いていないし、語っていない。それどころか、「はじめて山本周五郎を読んだのは、ウェルズの『火星人襲来』の翻案」と述べているのである。少し長くなるがこの発言を前後含めて再掲する。

山本さん、山手さんとは博文館以前からのつき合いなんです。山手さんは、浅草かどっかの中西屋という本屋で出していた『少女号』という少女雑誌の編集者だった。山本さんは『少女号』に書いていて、山手さんが博文館に入ったとき、いっしょについてきたんです。山手さんがはじめに担当した『少女世界』に山本さんが書いたのは、純文学傾向の少女小説らしかった。「須磨寺附近」を書き、盛んに懸賞の脚本募集に応募していたころですね。新国劇の「法林寺異記」もそうですし、又五郎劇団の募集にも当選した。

山手さんが『譚海』に移ってからは、立川文庫ですよ。これがまたうまいんだ。わたしがはじめて山本周五郎を読んだのは、ウェルズの「火星襲来」の翻案ですよ。それが、ずっとつながっている小説じゃなしに、かこみものが毎ページに入っているんです。それで連続している。何でもやるんですよ。ぼくらの頼んだのは、ほとんど少年探偵小説ですね。この間もちょっと読んでみたんですが、非常にうまい。ただ、漢字を使うんですね、子どもの雑誌のくせに。ギョッとしたなんか、かたかなでないんだ。「恂」と書いて（ぎょつ）とルビ振ってあるんです。当時は、オールルビだからね。「洋燈」と書いてランプと読ませ、「寝台」としてベッドとルビを振る。⁽³⁸⁾

このうち山手樹一郎との関係、脚本執筆の件、『少女世界』上の作品、『譚海』での少年探偵もの、ルビの件はすべて確認がとれる。唯一確認できないのが「はじめて山本周五郎を読んだのは、ウェルズの『火星襲来』の翻案」の部分である。手がかりは『宇宙戦争』の翻案らしいという点と、「ずっとつながっている小説じゃなしに、かこみものが毎ページに入っている」という説明である。まず、かこみものが毎ページに入っている雑誌がないか探してみた。念のために大正末年から昭和7年までの『譚海』『少年世界』を調査した。『冒険世界』は1919年に終刊を迎え、それを継ぐ形で『新青年』が創刊されたので、それも加えて現在閲覧可能なすべての号を確認したが、かこみものが連続して毎ページに入っている誌面はなく、『宇宙戦争』の翻案と思われるものも2作品（「火星人の地球襲撃」「空魔襲来」）のみであった⁽³⁹⁾。ただ、「火星人の地球襲撃」には四角形の挿絵が挿入されており、他の誌面とはレイアウトが異なる。文字のポイントも小さい。これがかこみものと誤って記憶された可能性はある。

また、高森自身が実際に「火星人の地球攻撃」を書いたのならば、「私も同じように『宇宙戦争』を翻案した」等の発言があってもいいはずである。ふつう編集者が読み物を載せる場合、一話完結がほとんどである。後に作家に転身した者ならともかく、編集者人生を全うした高森である、彼がもし本当に執筆していたならこの7回の連載は忘れがたい経験であったはずだ。このように、高森自身が『宇宙戦争』の自作翻案に触れない以上、別人が（社員ゆえに差し障りのない）高森姓を名のったと考える方が自然である。

そこでこの証言の直前部分、「山手さんが『譚海』に移ってからは、立川文庫ですよ。これがまたうまいんだ」に目を向けてみる。「山手さんが『譚海』に移ってからは」とは「山本周五郎が『譚海』に書いた作品は」ととれるし、ここで言う立川文庫とは「（立川文庫のように）分かりやすい展開の講談調で、なおかつ人間味あふれる勇猛果敢な人物が主人公となっている」作品ということであろう。周五郎の『譚海』登場は、現在のところ1930年2月の「小法師の勝ちだ」ということになっている。幕末、井伊家が米国総領事ハルリス（ハリ

ス) から献上された宝石を奪われるが、背後にあるのは老中たちの権力争い、それを「ばか弥太」と呼ばれている少年、またの名を「小法師」が解決するという時代小説である。主人公の平生と真の姿にギャップがあり、読み物として十分満足できる。まさに「立川文庫」である。ばか弥太ものはその後も続くが、この成功が、高森の「僕らの頼んだのは、ほとんど少年探偵小説ですね」につながるのだろう。実際、その年の7月からは少年探偵・春田龍介もので周五郎は連載を担当する。となれば、「火星襲来」はそれより以前でなくてはならない。つまり、周五郎が博文館と縁のできた1929年中か、遅くとも1930年の前半までに、高森は周五郎の「火星襲来」と出会っていなければならないのである。まさに「火星人の地球襲撃」の時期である。

博文館雑誌における周五郎の複数掲載は、彼の結婚(1930年11月)後に著しく増加する。その場合のペンネームは、まず山本周五郎、続いて俵屋宗八というのが基本である。山本周五郎は彼にとって最も愛着のあるペンネームであり、デビュー作も戯曲もこの名前で書いてきた。博文館雑誌に初めて掲載された「春を待たずに」(1929年2月、『少女世界』)も山本姓である。だから『譚海』に「小法師の勝ちだ」を掲載する際、山本周五郎を使用することに抵抗はなかったであろう。だが、「火星襲来」となると話は別である。オリジナルではない翻案を山本周五郎で発表するとは思にくいからである。そこで、生活のための「稼ぎ原稿」と割り切って執筆し、ペンネームについては編集部任せにしたのではないかという推測が成り立つ。この間の日記が残されておらず⁽⁴⁰⁾、あくまでも推測の域を出ないが、1929年秋から1930年にかけての時期は、浦安から東京に戻って新規蒔き直しを決意したころに当たっている。1930年1月15日の日記には「余は今三つ許大衆物を書かねばならぬ」⁽⁴¹⁾とあるので、『譚海』の小法師もの以外の作品も執筆したと考えると、それが「火星襲来」ではなかったのか。そうすると高森の言う「火星襲来」が「火星人の地球襲撃」である可能性がいつそう高まるのである。

執筆者の件はひとまず置いて、「火星人の地球襲撃」の文体をチェックすることにしたい。正直なところ、この作品の全体から受ける印象は「周五郎的」である。特に初期の少年探偵・春田龍介もの(後に甲野信三名で書かれた「鉄甲魔人軍」も含む)や少年間諜ものに近い。もちろん、当時の少年誌には類似作品が多いから、印象だけで即断はできない。そこで、少し詳しく見ておきたい。先の高森発言の後半には周五郎の使用する漢字とルビについて『洋燈』と書いてランプと読ませ、『寝台』としてベッドとルビを振る」とある。「火星人の地球襲撃」はどうか。総ルビなので特徴的なものに限って取り出してみた。

頂邊てつぺんのガラス張りの円屋根とんやの下に⁽⁴²⁾

運転手は叫んで目をつぶつて把手^{ハンドル}を握る。自動車は正^{まさ}に進まうとする。(中略) 矢庭^{やには}に懐中^{ポケット}からとり出したナイフを閃^{ひらめ}かしてタイヤを一突き、(中略) 消防夫たちは、あまりに素速い、あまりに唐突^{だしぬけ}の早業にど胆を抜かれて呆気にとられた形。⁽⁴³⁾

玄関^{ドア}の扉のかげに銃剣を脇にかいこんだまゝ打伏^{うつぶ}せに倒れてゐるのは正^{まさ}しく一人の兵士である。⁽⁴⁴⁾

やがて例によつて物凄い活動^{シネマカメラ}撮影機^ラのやうな扮装^{いでたち}を整へ、十五揃つて立上つた。⁽⁴⁵⁾

彼の左手は、むんずと兵士^{バンド}の革帯を握つた。⁽⁴⁶⁾

ポケットやドアにはそれほど違和感がない。しかしドームやシネマカメラはなかなか独特である。外来語ではない頂邊や閃かす、唐突はさらに個性的である。加えて誰でも使いそうに見える「まさしく」も、漢字で書くと特徴的だ。実は「正しく」は周五郎が常用している表現である。同時期の周五郎の作品から引用する。

『おゝ正^{まさ}しく是こそハルリス献上の宝玉だ、では汝はもしや』⁽⁴⁷⁾

正^{まさ}しく二人とも射殺したと思つてみたらしい怪漢は、少年の突然の襲撃におどろいて⁽⁴⁸⁾

ちなみに小野廸夫の「空魔襲来」の結末にもこの副詞は登場するが、「正しく」ではなく「まさしく」である。他の作家の作品を繰ってみたが、「まさしく」も「正しく」も意外に登場しない⁽⁴⁹⁾。やや古い演説調の印象があるし、使われたとしても時代小説に多かったのではないだろうか。さらに、作品の最終局面、飛行機の登場に続く火星人たちの会話が独特である。

『なにか珍妙な方法で、人間が戦を挑んで来たぞ!!!』

『各々方油断めさるな』

『だが、一体あれはどうした機械でござらう』

『何はともあれ、あの二人の人間をお先に片づけ申さう』⁽⁵⁰⁾

これではまるで時代劇である。とても探偵小説を翻訳してきた高森栄次の文体ではない。そこで周五郎「小法師の勝ちだ」から奸物たちの相談場面。

『憎い奴め、どうしてくれよう』例の頭らしい武士が皆を振り向いた。

『この古^{ふる}邸^{やしき}は最早不用でござる故、この男を入れて火を放つてはいかゞでござる』一人が申出た。

『なる程、さういたせば何もかも灰になつて証拠は残らぬ訳、それがようござらうよ』と、相談は定^きまつた。⁽⁵¹⁾

当時の周五郎の文体とそっくりである。一方で、「火星人の地球襲撃」には周五郎の作品であると断定しにくい用語もある。例えば「様子」である。「火星人の地球襲撃」では終始「様子」が使用されるが、周五郎は「容子」と書くことが多いのである。

小高い丘の後に身をひそめてじつと様子を眺めてゐる。⁽⁵²⁾

互ひに顔見合せては何事か私^き語^ぎきあつてゐる様子。⁽⁵³⁾

どうやら掃^か部^ぶ頭^{のかみ}も、この附近に眼をつけた容子でござりますから⁽⁵⁴⁾

呻く声の容子では弾^た丸^まは余程急所にあたつたやうだ。⁽⁵⁵⁾

このように一部疑問は残りつつも、おそらく「火星人の地球襲撃」は周五郎の「稼ぎ原稿」だったのではないかというのが筆者の結論である。日本魂社を敲首され、浦安を逃げ出した一番苦しい時代である。「何でもやるんですよ」という高森の発言どおり、どんな仕事でも引き受け、何でも書いたのであろう。だから、渡された原稿に多少手を加えられても、あるいは作者名が異なろうと甘受したのではないか。おそらく「火星人の地球襲撃」は9割9分周五郎の作品だが、部分的に（たぶん校正時などに）編集の手が加わったのだろう。高森の「かこみもの」という記憶は、ひよっとすると版下や割付時のものであったのかもしれないのである。

おわりに

高森栄二の名は井口長次が考案したのではないだろうか。それは井口が周五郎の事情をもっともよく理解していたからである。だから、井口長次→井口長二に倣って高森栄次→高森栄二としたように思える。当時の高森は『譚海』の担当ではない。だからこそ差し障りのない同僚の名前を拝借したのではないか。そこには編集者の大半が多く、ペンネームを駆使

して作品を執筆し、一方で新人作家の面倒を見続けた博文館ならではののおおらかさがある。『宇宙戦争』の翻案である。あらかじめ高森に了解を得たか否かは不明ながら、英文科出身の高森姓を使用するのは無難なところである。高森にしたところで、おそらく完成した誌面を見て苦笑するだけで済んだのではないか。「高森栄二」は周五郎と博文館の結びつきから誕生した、本人たちの意図せぬペンネームだったのだと思う。

そんな博文館の社風に支えられて周五郎は少年雑誌で口を糊し、時代小説で修業を積み、やがて大人の時代小説作家へと転身する。井口の長次も高森の栄次（栄二）も、時代を経て周五郎の代表作に使用される。長次は『赤ひげ診療譚』（1959年）で登と親しくなる屈託のない長坊として、栄次は「凍てのあと」（1956年）で主人公として登場する。さらに栄二は『おたふく物語』（1955年）で主人公の兄、長篇『さぶ』（1963年）ではついに主人公となった。作家草創期の恩を、周五郎はそんな形でふたりに返したのである。

注

- (1) 特集「新発見 山本周五郎 幻の探偵小説」『小説現代』第49巻第7号、2011年。
- (2) 拙論「甲野信三としての山本周五郎」『三重法経』第144号、三重短期大学法経学会、2014年。
- (3) 拙論「草創期の山本周五郎 —22の筆名—」『三重法経』第120号、三重短期大学法経学会、2002年。
- (4) 拙論『『現代水滸伝』作者考 —未完の匿名小説—』『三重法経』第137号、2010年。その後一部修正し、『津市立三重短期大学 開学60周年記念論文集』2011年に再録。
- (5) 高森栄次『思い出の作家たち —雑誌編集50年—』博文館新社、1988年。他には次の対談がある。
「特集＝知られざる山本周五郎 小説だけに生きたサル山の大将」『月刊 噂』第1巻第4号、季龍社、1971年。
大草実、萱原宏一、下島連、下村亮一、高森栄次、松下英磨『昭和動乱期を語る —一流雑誌記者の証言』、経済往来社、1982年。
「高森栄次さんに聞く 博文館の時代」湯浅篤志、大山敏『叢書「新青年」 聞書抄』、博文館新社、1993年。
- (6) 前掲「特集＝知られざる山本周五郎 小説だけに生きたサル山の大将」、17頁。
- (7) 1925年～1930年の博文館雑誌（ただし、閲覧可能なもの）のうち、少年誌、科学誌を中心に調査した。
- (8) 日記からは1928（昭和3）年には博文館に原稿を持ち込んでいることがうかがえる。山本周五郎『青べか日記』大和書房、1971年、236頁以下参照。
- (9) 横田順彌『日本SFこてん古典〔1〕 宇宙への夢』早川書房、1980年。横田は柳田泉の『明治初期の翻訳文学』（春秋社、1961年）を参考にしたいが、訳者の近藤真琴について他著も含めて広く紹介している。ただし、小論では集英社文庫版、1984年を使用。35頁参照。

- (10)前掲書、35 頁参照。
- (11)前掲書、37 頁参照。
- (12)『探検世界』第 1 巻第 1 号、成功雑誌社、1906 年、26 頁以下。
- (13)前掲誌 第 4 巻第 6 号、1908 年、78 頁参照。
- (14)前掲誌 第 6 巻第 1 号、44 頁。
- (15)天眼通人「天界の大怪物ハレー彗星物語」『冒険世界』第 3 巻第 4 号、博文館、1910 年、59 頁以下参照。
- (16)火星隠者「火星軍隊の地球襲来」前掲誌 第 3 巻第 7 号、54 頁。
- (17)前掲、56 頁。
- (18)虎髯大尉「世界的大混乱」前掲誌 第 5 巻第 7 号、1912 年、17 頁。
- (19)ウェルズ「宇宙戦争」『世界大衆文学全集 24 巻 海底旅行、宇宙戦争』、木村信児・訳、改造社、1929 年、273 頁。
- (20)小野迪夫「空魔襲来」『少年世界』第 36 巻第 4 号、博文館、1930 年、44 頁。
- (21)前掲、45 頁。
- (22)前掲、52 頁。
- (23)前掲、56 頁以下。
- (24)前掲、60 頁。
- (25)前掲、60 頁。
- (26)例えば、内田雅克『大日本帝国の「少年」と「男性性」 ―少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」―』明石書店、2010 年、が参考になる。
- (27)高森栄二「火星人の地球襲撃」『少年少女譚海』第 11 巻第 1 号、博文館、1930 年、22 頁。
- (28)前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第 11 巻第 4 号、1930 年、108 頁。
- (29)前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第 11 巻第 6 号、1930 年、111 頁。
- (30)前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第 11 巻第 7 号、1930 年、34 頁。
- (31)前掲、39 頁。
- (32)前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第 11 巻第 1 号、1930 年、25 頁。
- (33)前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第 11 巻第 4 号、1930 年、105 頁。
- (34)1929 年 11 月の『少年少女譚海』に高森さかへ「巡礼お鶴 涙の詠歌」という作品が掲載されていると、他誌の広告によって分かるが、現在、同誌は発見されていない。
- (35)前掲「高森栄次さんに聞く 博文館の時代」、173 頁。
- (36)高森前掲書、3 頁。
- (37)前掲『昭和動乱期を語る 一流雑誌記者の証言』、175 頁。
- (38)前掲「特集＝知られざる山本周五郎 小説だけに生きたサル山の大将」、16 頁以下。

- (39) 1930年12月の『朝日』にドイツ映画『嘆きの天使』が7頁にわたって囲み記事で紹介されている。これと混同した可能性は捨てきれない。
- (40) 周五郎の浦安時代に記された、いわゆる『青べか日記』は1929年9月20日で終了、その後続く『山本周五郎 愛妻日記』（角川春樹事務所、2013年）は1930年1月14日から再開。この間の周五郎の行動については詳細不明である。
- (41) 前掲『山本周五郎 愛妻日記』、11頁。
- (42) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第1号、23頁。
- (43) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第3号、22頁以下。
- (44) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第4号、106頁。
- (45) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第5号、101頁。
- (46) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第7号、36頁以下。
- (47) 山本周五郎「小法師の勝ちだ」前掲誌 第11巻第2号112頁。
- (48) 甲野信三「鉄甲魔人軍」前掲誌 第12巻第9号、1931年、65頁。
- (49) 同時期の博文館雑誌『少年世界』から以下の作品について調査した。
- 森下雨村「怪人魔人」、黒髭中尉「ワーテル・ローの大激戦」第33巻第1号、1927年。
- 赤木正夫「魔の急行列車」第38巻第1号、1932年。
- 金王梅雄「火星航空賊」第38巻第2号～第8号、1932年。
- (50) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第7号、36頁。
- (51) 山本前掲「小法師の勝ちだ」、106頁。
- (52) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第2号、26頁。
- (53) 前掲「火星人の地球襲撃」前掲誌 第11巻第7号、34頁。
- (54) 山本前掲「小法師の勝ちだ」、105頁。
- (55) 甲野「鉄甲魔人軍」前掲誌 第13巻第1号、1932年、70頁。

付記

本文中に引用した博文館雑誌については三康図書館、神奈川近代文学館、昭和館所蔵のものを使用した。引用に際し漢字は新字に改めたが、かなづかいは原本のままとした。ほとんどの雑誌が総ルビなので、引用に際し可能な限りルビを省いている。なお、山本周五郎の自筆作品記録『わが為事』については、周五郎の次男である清水徹氏からオリジナルでの閲覧、引用の許可をいただいている。